



# デメテール Demeter

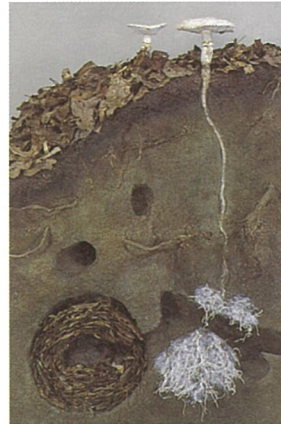
群馬県立自然史博物館だより No.7

Newsletter of Gunma Museum of Natural History 1998.秋

デメテールはギリシャ神話に登場する大地の女神で、群馬県立自然史博物館のシンボルマークになっています。



ホオベニシロアシイグチ(中沢豊子画) 夏～秋、雑木林に発生



ナガエノスギタケ (レプリカ)  
モグラ類の巣から生える



ベニテングタケ (宝台樹)  
食べると精神錯乱や幻覚があら  
われる毒きのこ



◀キノガサタケ  
(レプリカ)  
梅雨時と秋に発生す  
る「きのこの女王」  
中華料理の高級食材

## 第6回企画展 「きのこは木の子？」

「きのこ」と聞いて何を連想しますか？マツタケをはじめとする食べられるきのこ、テングタケを代表とする毒きのこ、あるいは西洋の童話に出てくるような森の妖精でしょうか？

では、「きのこって何？」と聞かれると、意外に答えられないのではないのでしょうか。実はきのこは動物でも植物でもなく「菌類」というグループの一員です。身近なようで、実はあまり知られていない生物なのです。

今回の企画展では、このようなきのこに関する疑問を来館者に投げかけ、それに答える形で展示を構成します。きのこはどのような生活をしてい

るか、他の植物や動物とどんな関係をもっているか、自然の中でどんな役割をしているか、などを紹介します。

また、群馬県でみられる野生きのこや、きのこ栽培の方法などもあわせて展示します。

(学芸課 綿貫 攻)

企画展特別講演会

「森ときのこと人」

講師：小川 眞 (関西総合環境センター  
生物環境研究所長)

10月11日 (日) 13:30~15:30

参加費無料・電話で申し込み

### はじめに

1998年5月9日から6月13日にかけて、毎週土曜日の午後2時から4時、当館学習室において、県民文化大学「日本人はどこから来たか」を合計6回実施しました。

### 日本人起源論の変遷

日本人の起源の問題は、すでに、江戸時代から日本人学者や外国人医官等によって論じられてきました。最近では、新しい遺跡・遺物・人骨の発見や新しい研究法の開発により、多くのことがさらにわかってきました。

これまでの説は、以下の4つに分かれます。

#### 1. 交替説（置換説）

元々日本にいた縄文人が、後から来た弥生人に交替し、その弥生人が現代日本人になったという説。

#### 2. 混血説

元々日本にいた縄文人が、後から来た弥生人と混血して現代日本人になったという説。

#### 3. 変形説

元々日本にいた縄文人が、稲作を中心とする弥生時代に起きた文化や生活習慣の違いにより、身体を変形させ、現代日本人になったという説。

#### 4. 二重構造説（図参照）

元々日本には、南方系の縄文人が全国にいた。弥生時代になると、北方系の弥生人が西日本を中心に大量に渡来してきた。中部から東北地方にかけては、縄文人と弥生人が混血した。しかし、北海道や琉球諸島へは、渡来人の影響があまりなく、その縄文人がアイヌや琉球諸島の人々になったという説。したがって、現代日本人には、南方系と北方系の人々が二重に存在すると考える。

今回は、最新の考え方である二重構造説を、人類学だけでなく、生体学・遺伝学・古生物学・考古学・動物学・植物学・言語学・民俗学等の成果をふまえ、総合的に検証しました。

### 総合検証結果

#### 1. 人骨が語る証拠 [1998年5月9日実施]

遺跡から出土した人骨の研究では、縄文人の頭は現代のアイヌと近縁であり、弥生人や古墳人は現代の本州人と近縁であることがわかりました。また、歯の研究では、縄文人は小さい歯を持ち、弥生人や古墳人や現代日本人は大きい歯を持つことがわかりました。

●南方系 ○北方系 ●中間系



二重構造説の概念図（埴原、1995・1997を改変）

## 2. 身体が語る証拠 [1998年5月16日実施]

(表参照)

生きている人の身体の研究では、縄文系の人々は暖かいところに住む人々の身体と似ており、弥生系の人々は寒いところに住む人々の身体と似ていることがわかりました。

これは、ヒトにもベルクマンの法則やアレンの法則があてはまる例です。

南方系(縄文系)と北方系(弥生系)の判別表			
項目	南方系(縄文系)	北方系(弥生系)	
1 身長	背が低い(同年の中で)	背が高い(同年の中で)	
2 体型	ほっそりとしている	ずんぐりむっくり	
3 体重	軽い(同年の中で)	重い(同年の中で)	
4 手足	細くて長い	太くて短い	
5 指	細くて長い	太くて短い	
6 髪の毛	波状毛(くせ毛)	直毛	
7 頭の形	長頭(前後に長い)	短頭(丸い)	
8 顔の形	角形で彫りが深い	面長でのっぺり	
9 目	大きく丸い	小さく細い	
10 瞼	二重	一重	
11 蒙古襞	ない	ある	
12 左目つぶり	うまい	へた	
13 鼻	高くて長い	低くて広い	
14 耳たぶ	分離型(福耳)	密着型	
15 耳垢	ウェット型(湿っている)	ドライ型(乾いている)	
16 唇	厚い	薄い	
17 髭や体毛	濃い	薄い	
18 体臭(腋臭)	ある	ない	
19 指紋(三叉数)	少ない(11以下)	多い(12以上)	
20 血液型	O型	A型	
最終判定	南方系(縄文系) /20	北方系(弥生系) /20	

## 3. 遺伝が語る証拠 [1998年5月23日実施]

HB抗原の研究では、東日本に東南アジアと共通の型が多くみられ、西日本では中国や朝鮮と共通の型が多くみられます。

赤血球酵素GPTの研究では、アイヌや琉球諸島の人々では数値が低く、本州では高いという結果が得られました。

ATLウイルスの研究では、このウイルスがアイヌや琉球の人々に多く見られることがわかりました。

JCVウイルスの研究では、東日本にMYタイプが、また西日本ではCYタイプが多いことがわかりました。

ミトコンドリアDNAの研究では、縄文人骨から直接得たDNAが、東南アジアの人々と近縁であることが確かめられました。

## 4. 動植物が語る証拠 [1998年5月30日実施]

イヌの研究では、まず、南方からイヌが日本に渡来し、その後、朝鮮半島から北方のイヌが渡来

したことがわかりました。イヌは、家畜の中でも一番古いことから、ヒトの動きも同様に南方から縄文人が、そして後から弥生人が北方からやってきたことが示唆されます。

ネズミの研究では、まず、南方系のキャストネウス型が元々いたところへ、後から北方系のムスクルス型がやってきたことがわかりました。ネズミは家畜ではありませんが、ヒトの移動と密接な関係があると考え、前者が縄文人とまた後者が弥生人と一緒に渡来したと考えられます。

プラントオパール法によると、平安時代までの遺跡には焼き畑で栽培する「熱帯ジャポニカ」が多く、それ以後の遺跡ではほとんどが水田で栽培する「温帯ジャポニカ」であることがわかりました。

## 5. モノが語る証拠 [1998年6月6日実施]

発見された遺跡の数から、縄文時代や弥生時代の人口を推定すると、縄文時代は、東日本が人口の中心であるのに対し、弥生時代は、西日本が人口の中心であることがわかりました。これは、弥生時代に大量の渡来があったことを示唆しています。

## 6. 言葉や風習が語る証拠 [1998年6月13日実施]

方言の分布を見ると、東日本と西日本とで分布が大きく分かれる言葉があります。例えば、『薬指』のことを、東日本では「クスリユビ」と言うのに対し、西日本では「ベニサシユビ」と言います。同様に、『鱗』は東日本では「コケヤコケラ」と言い、西日本では「ウロコ」と、『梅雨』は東日本では「ニューバイ」と言い、西日本では「ツユ」と言います。

ヒトの気質には、分裂質と躁鬱質がありますが、分裂質は東日本に多く、躁鬱質は西日本に多いことが知られています。

## おわりに

二重構造説は、1990年に、当時国際日本文化研究センターにいた埴原和郎さんにより提唱されたモデルです。今回、二重構造説を総合的に検証した結果、多くの点で現代日本人には南方系と北方系という2つのタイプが存在することが示唆されました。しかし、この説にあてはまらない研究結果もあり、これからも検証していく必要があります。

今回は50人の登録があり、4回以上出席された40人の方々には修了証が授与されました。受講者の皆さん、お疲れさまでした。

## — 参考文献 —

埴原和郎

1995 『日本人の成り立ち』、人文書院

1997 『日本人の骨とルーツ』、角川書店

山口 敏(監修)

1997 『日本人の起源の謎』、日本文芸社

(学芸課 檜崎修一郎)

渡良瀬川支流山塊は、板倉町や館林市の渡良瀬川の支流である谷田川・矢場川流域の湿地から藪塚本町・太田市・桐生市にまたがる八王子丘陵の低山帯、赤城山・袈裟丸山などの標高の高い山まで広大な地域を有します。長年の調査から、この地域に自生する野生植物は、約800～1300種類と考えられますが、近年の急激な開発により、その数は減少しつつあります。また、帰化植物の侵入による植生への影響も見逃せない状況となっています。以下にこの地域の特徴的な植物の解説をします。

### 1 ササの分布

群馬県は、積雪量によって植生が2大地域に区別されます。ミヤコザサは、積雪50cm以下の太平洋型気候域に分布し、この地域を太平洋型植生域としています。また、チマキザサは積雪50cm以上の日本海型気候域に分布し、この地域を日本海型気候域としています。そこで、積雪量50cmのラインをミヤコザサ線と呼びます。

渡良瀬川の源流部にある袈裟丸山は、日本海型植生域と太平洋型植生域の境界区域にあるため、それぞれの植生域の植物が混生し、特異な分布が注目されます。赤城山も太平洋型植生域に入りますが、日本海型植生域に生えるオオバザサ・ミヤマザサ・シナノザサの分布の飛び地として注目されます。さらに、チマキザサ節ミヤマザサが赤城山より更に東方の勢多郡東村と栃木県境の氷室山(1,154m)の上部の全山にも分布することがわかり、以前は現在より積雪量が多く、日本海型植生域がより南で太平洋岸近くまで広がっていたと考えられたことが裏づけられる大きな成果と思われます。

### 2 暖温帯常緑広葉樹林の植物

この地域は、暖温帯常緑広葉樹林の内陸部における北限地帯に入ります。特に、この地域の東南部の低山帯は、南に開けた谷があり冬の北西季節風の影響を受けにくい地形を形成しています。そのため、暖地性植物が多く分布しています。

#### (1) 樹木

ヤブツバキ・シラカシ・アラカシ・ウラジロガシ(唐沢山・太平山・桐生賀茂神社)・ヤブニッケイ・ヒサカキ・スダジイ・タブノキ(唐沢山・太平山)・ツルグミ(八王子丘陵・太田市金山)等

#### (2) 草本

マンリョウ・キチジョウソウ・ハダカホウズキ・ヒメアブラススキ(館林市・岩船山)・メヤブソテツ(出流山)・ヒメカナワラビ(館林市・北限)・コシダ(唐沢山)・ウラジロ(唐沢山・太平山)・コバノカナワラビ(足利市・吾妻山)・クリハラソ(出流山)・タチシノブ(唐沢山)等

#### (3) 水生植物

ムジナモ(絶滅)・オニバス・ミズオオバコ・トチカガミ・ガガブタ・ミズワラビ・アサザ等、館林市、邑楽郡地方の池沼に多く分布。

### 3 北方系要素の植物

サワギキョウ(館林)・ヤマハハコ・マイヅルソウ・ヒメマイヅルソウ(赤城山・袈裟丸山)・イヌドクサ・シラカンバ・カシワ・ミズナラ・イトハコベ(館林)・タチスミレ(板倉町)・ホソバナヨツバムグラ(館林)等

### 4 フォッサマグナ要素の植物

西限を糸魚川-静岡構造線とする断層陥没地帯で、多数の火山が分布します。この火山の影響などによって、変異を起こした新種や変種を「フォッサマグナ要素」の植物といいます。

赤城山・・・フジアザミ・アカギキンポウゲ  
袈裟丸山・・・アカギキンポウゲ・カイトカラコウ  
足尾山地・・・ハコネギク・ハコネハナヒリノキ

### 5 そはやき要素の植物

南九州・四国・紀伊半島と中央構造線に連なって分布する植物群を「そはやき要素」といい、関東地方を北限とした古い地質地帯に分布する日本固有の植物群と考えられています。

ヤマグルマ・ハリモミ・ツガ・レンゲショウマ  
トウゴクヒメジャラ・カッコソウ(鳴神山)・ナツツバキ・シオジ・ヒカゲツツジ・アカヤシオ等



チマキザサ節 ミヤマザサ

# 9月の天体観望会 から -夏の大三角-

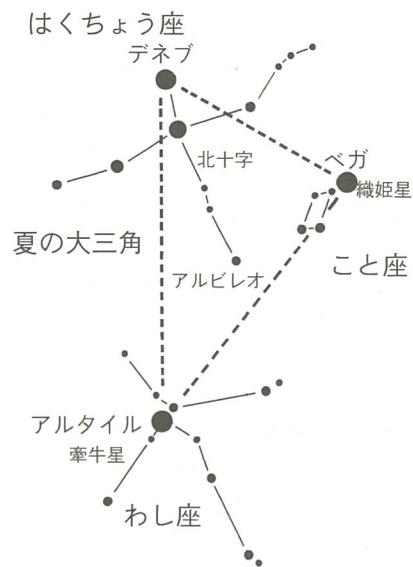
夏の夜、南に向いて空を見上げると、光輝く美しい天の川が見えますが、その中でも一際大きく輝いているのが、はくちょう座の「デネブ(白鳥の尾)」です。続いてはくちょう座の西に目を移すと、夏の夜空では1番明るく輝いている、こと座の「ベガ」が見つかるでしょう。そのベガから天の川を挟んで反対岸に目を向けると、わし座のアルタイルが輝いています。この「ベガ」と「アルタイル」は、「織姫星」「牽牛星」として七夕で主役の星たちです。これら3つの星座の1等星、「デネブ」、「ベガ」、「アルタイル」とで形作られる三角形を、夏の三角形といいます。春・夏・冬の3つの大三角のうち、直角三角形に一番近いのが夏の大三角です。

はくちょう座の特徴だけ取り上げると、冬、クリスマス夜8時頃になると西の地平線に十字架のように立つため、南十字に対して北十字と呼ばれています。「デネブ」の東3°ほどに北アメリカ大陸に似た、その名も北アメリカ星雲(NGC7000)があります。この星雲は、天の川の中でも最も印

象的な星雲のひとつで、肉眼でも目の良い人は、かすかに見えるでしょう。写真に撮ると、見かけの大きさが満月の3倍以上にもなって現れます。

くちばしにあるβ星のアルビレオは全天で最も美しい二重星といわれ、トパーズ色の明るい主星と、サファイア色の伴星が互いにまわり合う連星です。双眼鏡でも見る事が可能なので観測してみましょう。

まだまだ他にもありますが、9月の天体観望会で、これらの特徴的な星や星雲を見つけてみましょう。(学芸課 萩原 真樹)



## オリジナルビデオが完成しました

「大気をめぐる地球環境問題」

(一般向け 18分)

「大地のつくり～地層から分かること～」

(小学校6年生学習用 14分)

館内の学習室や情報コーナーでご覧いただけます。

「大気をめぐる地球環境問題」は酸性雨やオゾン層の破壊の問題を、資料映像を使って解説しています。また、「大地のつくり」は、県内の小学生に出演していただいて制作しました。ぜひ一度ご覧下さい。



◀「大地のつくり」収録中のひとこま

## 児童生徒理科研究作品展

9月8日(火)～11月29日(日)

企画展示室前のエントランスホールで、県内の小・中学生が行った理科研究の作品を展示します。群馬県生涯学習センターで夏休み中に展示したあと、当館に会場を移して展示するものです。

展示する作品は、平成9年度の群馬県理科研究発表会で発表された作品のうち、優秀賞以上を受けた約70点ですが、作品数が多いため、期間中3回に分けて展示します。

県内の小・中学生の質の高い作品をぜひ一度ご覧ください。また、小・中学生には、この作品をじっくりと見て、今後の自分たちの研究の参考にしていただきたいと思います。

## カリユシの海の生き物

沖縄は熱帯の様相を見せる海に囲まれています。サンゴ礁を彩る小さな魚たちはダイバーにとって憧れですが、沖縄の海には大型の哺乳類である鯨類や大型魚類のサメの仲間を始め、豊かな海を象徴する生き物がたくさん見られます。講師の内田詮三先生は、沖縄海洋博の会場にもなった、国営沖縄記念公園水族館（以下水族館）の館長さんですが、この水族館では、体長8メートルのジンベエザメやマンタと呼ばれているオニイトマキエイを中心とするたくさんの生物が飼育され、人気を博しています。中には、世界でここだけでしか見られない種類もいます。

講演会では、水族館で飼育されているものだけでなく、講師の研究に基づいた鯨類の話や、水族館として調査しているジュゴンの生態などについてスライドを使って説明していただきました。

水槽の中で大型のサメの餌食になった小型のサメや外洋でサメに襲われ、死体となって打ち上げられた鯨の写真を見て、改めて自然の厳しさを痛感した参加者も多かったようです。また、ビニル

袋を飲み込んで胃の中が一杯になり、餌が食べられなくなって死んでしまったイルカの胃の内容物のスライドや、釣り糸を餌のアマモと一緒に飲んでしまい、腸が切れて死んでしまったジュゴンの腹の中のスライドを映しながら、「こんな所ならと思って捨てたビニル袋が、最終的に海に流れ込んでこのような事態を招いています。お母さん方は、子どもたちに絶対ごみを捨てさせない教育をしてください。」とまとめた言葉については、大きくうなずいている方がたくさんいらっしゃいました。  
(教育普及課 里見 立夫)



## 自然の恵み4（群馬の天然記念物）「尾瀬」

尾瀬の天然記念物指定候補地調査は昭和5年7月に行われ、天然記念物の価値ありと判断されました。一方で戦前・戦後を通じて、尾瀬の水を発電に用いる計画が再三浮上し、特に昭和23年には尾瀬ヶ原が水没する発電用ダムが計画されました。この計画に反対して結成された尾瀬保存期成同盟による運動が功を奏して、また、昭和25年から行われた文部省総合学術調査により、改めてその価値が認識され、昭和31年8月9日尾瀬はようやく天然記念物に指定されました（特別天然記念物指定は昭和35年6月1日）。

尾瀬は天然記念物の中でも「天然保護区域」に位置づけられます。天然保護区域とは「保護すべき天然記念物に富んだ代表的一定の区域」と文化財保護法に定義され、大雪山、上高地など全国23カ所が指定されています。尾瀬での指定地域は至仏山、燧ヶ岳、アヤマ平、景鶴山などの尾瀬ヶ原や尾瀬沼を囲む稜線の内側で、尾瀬ヶ原から流出する只見川の河床北端は三条ノ滝が境界になっています。

尾瀬の価値を高めたものに本州最大の高層湿原と言われる尾瀬ヶ原があります。尾瀬ヶ原は最大5m近い泥炭層が堆積し、8,000年以上の時間を要して形成されたと言われます。高層湿原や至仏山の蛇紋岩地などにナガバノモウセン

ゴケやオゼソウに代表される北方系の植物152種を含む902種の植物が生育し、また、尾瀬で発見されたオゼイトトンボなど29種の北方系のトンボが生育しています（菊地・須藤，1991：「永遠の尾瀬」による）。さらに、多くの風景要素を含み、複雑で変化に富んだ景勝地である点、換言すれば多種多様な地形要素と植生が存在する点も天然記念物指定理由にあげられます。特に山地帯以上の典型的な垂直分布帯、低層湿原から高層湿原に至る各種の湿原植生、さらに至仏山の蛇紋岩植生は高い植物生態学的な価値を有するだけでなく、多様な植生は多様な動物の生存の基盤となっています。

(学芸課 大森 威宏)



## 展示解説員から

「スズメって骨だけ見ると人間と同じような感じなんです。」これは、Cコーナーのカウンター上にある、セキツイ動物の亚克力標本を見たお客様の言葉です。今年度からCコーナーに“観察・実験カウンター”が登場しました。ここには、ドングリやチョウ、セミ、ネコの骨、テレビ石や方解石などいろいろなものが並べられています。標本をじっくりと観察したり、簡単な実験をして、博物館を楽しむことができます。中でも、子供たちに一番人気があるのが“火山灰の中から宝石を探そう”というわんがけの実験です。火山灰をきれいに洗うとキラキラした鉱物が現れます。顕微鏡を覗く子供たちからは、歓声が上がり、質問が飛び出します。私たち解説員は、ボランティアの皆さんと協力して、そんな質問に答えたり、いろいろなものを違った面から見るお手伝いができればと考えています。

さて、それではここで問題です。風に揺れるツクシから緑色の煙のようなものが出てきます。これはツクシの胞子ですが、その胞子には弾糸という足のようなものがついています。弾糸はある刺激を受けると動きま



ず。いったいどのような刺激で、なぜ動くのでしょうか？答はCコーナーまで。皆さんのお越しをお待ちしております。

(解説員 山田 香織)

## 博物館をささえる人たち

神戸 明比古さん(空調設備運転管理)

設備管理会社から派遣されて、自然史博物館の開館時から空調設備の管理の仕事についています。

「空調設備」というとすぐに思い出すのは冷暖房ですが、実際には温度、湿度、CO<sub>2</sub>濃度など、調節しなければならない要素は広範囲に渡っています。

博物館の展示室は巨大な空間で、照明設備、来館者の体から放出される熱エネルギー、CO<sub>2</sub>は莫大なものです。その調節だけでも簡単なものではありません。展示資料の損傷を防ぎ、来館者の皆さんに、四季を通じてより快適に見学していただくため、ハイテク技術を駆使した最新鋭の空調設備を運転、保全管理しながら博物館の環境を見守っています。



## ハブの採毒実演

7月25日・8月5日・8日の3日間、当館では企画展の関連行事として、ハブの採毒実演を行いました。これは、藪塚本町にある(財)日本蛇族学術研究所の協力を得て行いました。3日間、講師を村木研究員にお願いし、11時、13時、15時の3回実施しました。

ハブを人工芝を敷いたテーブルの上に置き、その性質や毒性について解説の後、村木研究員が頭を押さえ、ハブの口を大きく開けさせます。口内の上部にある2本の牙から、毒を採取するわけです。1回の採毒で、計量カップに2ccほど集めることができました。ハブの毒は、噛まれると危険ですが、飛んで着いたり、なめたりといった行為ではほとんど危険はないとのことでした。

周囲に集まった来館者からは、怖さ半分、好奇

心半分といった表情がうかがえました。今回はハブの他にマムシやヤマカガシの紹介もありました。

本企画展では、この採毒実演で使用したハブをはじめとして、ヘビやウミヘビ、カメといった爬虫類も多数展示しています。最近のペットブームを反映して、これらのコーナーに興味をもつ方も多くなっているようです。取り扱いに注意すれば、おとなしい動物たちです。これらの動物たちを正しく理解してもらえればと思いました。

(学芸課 伊勢川 聡)



新収蔵資料

ザガミ隕石（火星起源の隕石）

現在まで火星起源の隕石は12個が知られており、それらの重量合計は約80kgになります。これらは、シャーゴット・ナクライト・シャシナイトの大きく3つのグループに分類されます。

ザガミ隕石はそのうちの1つで、1962年10月3日ナイジェリアのカッシナ地区に落下した隕石です。発見された総重量は約18kgです。前述の分類ではシャーゴットに分類され、地球上の岩石では玄武岩に近いことがわかっています。複数の

研究者がこの隕石の形成された年代を放射性元素を用いて測定していますが、約1億2000万年前から2億6000万年前までとばらつきがあります。1つの値に落ち着くのはまだ時間がかかりそうです。

（学芸課 野村 正弘）



インフォメーション（10月～12月の行事）

第6回企画展「きのこは木の子？」  
10月3日（土）～11月29日（日）

児童生徒理科研究作品展  
9月8日（火）～11月29日（日）

10

- 3（土）～11月29日（日）第6回企画展「きのこは木の子？」
- 11（日）🔍 企画展記念講演会「森ときのこの人」  
講師 小川 眞（関西総合環境センター生物環境研究所長）
- 18（日）📖 おもしろ科学教室「葉脈標本を作ろう」
- 25（日）📖 菌類の世界
- 28（水）🌌 月と土星

11

- 8（日）🌸 川原の石
- 14（土）🌌 しし座流星群と秋の星座
- 15（日）🌸 押し花で年賀状を作ろう
- 29（日）🌸 押し花で年賀状を作ろう

12

- 6（木）📖 吾妻川流域の自然
- 12（土）🌌 ふたご座流星群とスバル
- 27（日）～1月3日（日）臨時休館

利用案内

- 開館時間／午前9：30～午後5：00（ただし入館は4：30まで）
- 休館日／毎週月曜日（祝日の場合は火曜日）・年末年始（12月27日（日）～1月3日（日））  
1月4日（月）は開館します。
- 観覧料／一般500円（400円） 高校・大学300円（240円）  
小・中学生100円（80円）  
ただし10月3日（土）～11月29日（日）は企画展開催中のため一般700円（560円）、  
高校・大学生400円（320円）、小・中学生200円（160円）  
※1. 65歳以上・幼児・身体障害者は無料  
※2.（ ）内の数字は、20名様以上の団体割引です。

■凡例

- 🌿 自然教室
- 🌌 天体観望会
- 🔍 講演会・シンポジウム
- 👨‍👩‍👧‍👦 ファミリー
- 🌸 自然観察会
- 📖 自然史講座

休館日

○印の日は休館いたします。

	日	月	火	水	木	金	土
10月					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	31
11月							
	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30					
12月							
					1	2	3
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30	31		